



水玉模様

教えて どうしたらいい？ どうしようもない どうしたらいい？
どこへ帰ろうか どうしたらいい？ どこにもない どうしたらいい？

水玉
雨を知る
恵みの雨
その子にとっては
水も満足に
飲んでない

儂い色の花から
こぼれた雨が泣いている
洗ってない髪から水滴
泥の勢いに飛ばされてく

アルコール
狂いの父は
毎晩
その子を殴った
日付が替わるまで

学校では「汚い」と
靴を盗まれ
暴言を吐かれ
ベッドでうつ伏せで
泣いていた

歩く
あてもなく
濡れたアスファルト
ここがどこかも
わからない

教えて どうしたらいい？
全知全能の神なんてきつといない

いたらこんなに苦しいはずない
辛いはずない
何歩歩いてても
同じ場所へ戻ってくるの

水玉模様の
スカートを
履いた悪鬼が
その子を罵る
夢の中でさえ

手ぶらで
歩く
車が止まる
その子の
腕を引く

教えて どうしたらいい？
全知全能の神なんてきつといない
いたらこんなに悲しいはずない
虚しいはずない
誘拐されたその子は
変わり果てた姿で見つかった
犯人はまだ見つからない

水玉模様のような命
増えすぎた人間共に
明日は無い
ノアの箱舟なんか無い

行き場も帰る場所もなく 公園で時間潰してた
そうして今僕は無職で 病室でこれを書いてる

熱病

熱すぎる

身体が熱すぎる

段ボール箱のいらないやつの上に

置かれたまずい飯を食べる

ここは独房

熱すぎる

すでに燃えている

シーツが冷まそうとも

この熱は冷めることはない

見てろよ

誰に死ねって言われたって

誰に首を絞められたって

誰に閉じ込められたって

誰に全否定されたって

誰に何されたって

この熱病を

治療するなんてできないさ

心が熱すぎる

過呼吸になってる

生きたいって燃えている

これまで生きてきた

どのシーンよりもっと

監視カメラの下

シーツにくるまってる

涙はどんどん溢れてくるのに

体温は消えたりしない

誰に毛嫌いされようが

誰に盗まれようが

誰に襲われようが

誰に笑われようが

誰に差別されようが

見てろよ

わたしは生まれた瞬間からずっと熱病にかかっている

どれだけ挫けたって

自分がこの世界の主人公だと本気で信じているのだから

苦しくて堪らないくらいに燃えているんだ

水かけたって 涙かけたって 無駄

ホビットたちが一斉に暴動を始める

胸の奥の奥の奥の奥

誰が火をつけたんだ

燃える事でしか人間でいられない

プラチナ

君はこの世の人じゃなかった
初めて見たときから
一目惚れって
こういうことを言うのかな
華奢で真っ白な手
蒼のフードを深くかぶる
プラチナの長い長い髪
この世の人じゃない

妖精さん
妖精さん
大好き
本当に死んでしまいたい
妖精さん
妖精さん

水晶体で
プラチナの髪を数えると
脳内物質が
ケンカを始めるんだ
妖精さん
飛んで踊って跳ねて狂って乱れた髪を
かき上げる

血文字でI LOVE YOUって
書きたいな
誰もいないビーチにI LOVE YOUって書きたいな
明けていく空に
I LOVE YOUって書きたいな
書きたいな

妖精さん
妖精さん
美しい人

発狂したって届かないね

妖精さん

妖精さん

想像するの

長い前髪の下の目は

何色かなって

グレー？それとも蒼？

何色かなって

それから

年月が経ち

いつか君は

君は

ただの男になってしまった

成長したんだね

おめでとう

妖精さん

妖精さん

プラチナの髪は

いつしか茶髪になってしまった

妖精さん

妖精さん

妖精さん

妖精さん

ここはどこ？

真っ暗闇

妖精さん

妖精さん

君はもう

ただの男になってしまった

彼女は目が見えないのだと言った
何で目が見えないのかと尋いた
彼女は応えた
怒りで目が見えないのだと

メリーゴーランドのように
手をつないで回る
大好きな誰かと手をつないでくるくる回る
景色がにじんで溶けていくイルミネーション
手のぬくもりをまだ覚えてる

目の覚めた後でも

彼女は耳が聞こえないのだと言った
何で耳が聞こえないのかと尋いた
彼女は応えた
もう何も聞きたくなくて耳栓をしているのだと

何かのダンスのように手を叩き踊る
冷たい誰かの手をあたためる
人の輪ができて花火みたいだと笑う
ひとりじゃないのをまだ覚えてる

目の覚めた後でも

すすり泣く声が聴こえる
彼女に何で泣いているのかと尋いた
涙をどうしようもないからだ
目も耳も見えない
聴こえないからだ

あじさい

ほら あじさいの花が咲いたよ
あんな場所に咲いてても 誰も見ていないのになあ
あじさいの花といえば もうすぐ君の誕生日だね
雨に打たれても負けない芯の強さが ちょっと君に似てるかなあ

本当は
本当はどっちでもいいんだ
君があじさいに似てるかどうかなんて
君を祝う気持ちは変わりはないのだから
ただあじさいを見て思ったんだ
君の誕生日だなんて

あじさいが薄闇の中咲いている
こんな時間に咲いたって見るのは病人だけなのになあ
馬鹿な
馬鹿げた解釈だけど
わざわざ苦しむ僕を励ますために
咲いてくれているのかなあ
いつも隣にいた君みたいに

本当は どっちでもいいんだ
あじさいはあじさいで 君は君
あじさいなんかなくて 僕は君の誕生日を祝う
ただあじさいの花がきれいだなんて
思ったんだ
君の誕生日だなんて

マザーファッカー

俺はロウソクの火
命ってこんなもんだ
それを誰かが吹き消すんだな
「お誕生日おめでとう」
何がプレゼントだよ
まだ1分も生きてねえぜ

真っ暗なところで消される
仲間と同時に ガス室みたいだな
ねえ聴いてないだろ？
いいぜ あんたが聴いてるなんて最初から思っていない

ロウソクが消えた ただの燃えた カスになった
お誕生日〇〇くんおめでとう いつまででもやってろ
カスになって 抜かれて 舐められて 捨てられるんだろ
いいぜ 最初から何も期待していないから

俺を消せよ 早く消せよ マザーファッカー
吹き消せば1歳大人になれると思ってんだろ？
別にいいよ 俺は消えるから

一瞬
きらめいて
知らないガキのために消える
無駄な命
もういいよ
俺が消えると
皆手を叩いて喜ぶのだから...

私の部屋をロックして

何もやる気起きなくて
何も刈る気起きなくて
何も動悸起きなくて
一日中寝てた

鼻毛が出てる
鼻毛が出てる
消毒臭い部屋で
一日中寝てた

何か動く気起きなくて
何か黒く気起きなくて
何かすごく気起きなくて
一日中寝たい

鼻毛 壊れた時計
鼻毛 流れるノート
それがどうしたんだ
息が詰まりそう

何か酸っぱい匂いのする場所で
一日中寝たいのに
鼻毛が出てる
鼻毛が出てる
バカ

私の部屋をノックして
私の部屋を毒して
私の部屋をロックして
鼻毛
死んだヤモリの跡がする

ホトケさん

寝室に黒が灯ったとき ちょっとびっくりしたんだ
透明で見えないはずの僕を照らす心の闇があるんだな
首吊ったけど死ねなくて生きてる 三途の川さえ渡れない奴
ホトケにも電気を使う資格があるのだなあ
誰も寄り付かない
寄り付けよ
寄ってほしくない
こっち見るな
死にたい奴はテレビ見てろ
孤独の中を彷徨い続け 踊り続け 疲れ果て
ねえ
紙とペンさえあれば
生きていける

僕は死んでしまった幽霊か精霊か または妖精さんみたいなもの
何百年も生きてるから孤独とかそういうのわからないけど触れるものなの？
窓の外的光を見てたら成仏しそうでカーテンを閉めた
感情が落ちてたら拾っという盗んでもたぶんバレないだろ
誰も気づかないし
気づくな
気づくな
どこ見てんだ
見ろよ
凡人には見えないことにしてる
殴られたら
殴り返すよ
殴るよ
聞ってる？
今どこ見てた？
殴ってやろうか？
嘘だよ
ねえ
紙とペンさえあれば
生きていける
そうでしょう？

太陽と月がなくても 幸せだったら別にいいんじゃない？
だって酸素さえもうないから PM2.5 吸って生きてるんだ
近づくな見るな寄るな触るなあっち行けとっとな行けテレビ見てろ
愛してるからさ今晚だけ一緒に寝ようぜそれもだめなんですか？
ねえ
僕はホトケさん
紙とペンさえあれば
生きていける
紙食って ペンのインク飲むんだ
何百年何千年でも てめえが死ぬまで生きていける

ソフトクリーム

君の音がする
やさしい声

君の音がする
甘い声

目から流れてきた
液体

笑顔になる
消えていく

あったかい
寂しい

死にたい
やわらかい

大好き
虚しい

壊れそう
かわいい

やさしく甘いソフトクリームのように
体が溶けていくわ
君の声の中に

お願い
私に唾をかけて
その激しくて切ない唾をかけて
この燃えるような気持ちを
爆破して 爆破して

お願い

私に唾をかけて
その汚れたシャボン玉みたいな唾をかけて
私は落ちる寸前の線香花火
爆破して 爆破して

私はソフトクリーム
溶けていく
愛しい君の唾だらけ
声だらけ
白い灰だらけ

なにこれ
あったかい
やわらかい
ドキドキする
バカみたいに

血の湖

血の湖を 泳ぐ怪物は
名前もないし ここから出れない
目が一つしかない ただそれだけで
怪物と 人間達が名付けた
血の湖を泳いでいるだけで
人に見つかるだけで
誰も怖いと寄り付かないし 湖の周りには有刺鉄線

救いがない 救いようがない
血の中に沈む夕日もまた同じか
血を飲みすぎたら 死ねるかと思った
もう死んで 死んでしまいたかった
神様とやらがいるのなら 救ってみろよ あんたには救えないでしょう？

脱走を考えた ただぼんやり考えた
もうこの醜い体は どうなってもいい...

有刺鉄線を食い破った
口にやるせない痛みが走った
トゲだらけの口と体で ただ一匹陸に上がった
体から大量の血と痛みが 血の湖へと流れてく
もう怖いものなんて何もない この痛みほど痛いものはない

脱走したよ 誰に伝えるあてもなく
森の中へ行こう 誰にも会わずに生きていこう

トゲが電気みたいにさ 体を熱く冷たくおかしくする
気がつくと新しい血の湖が 僕の通った跡にできていた
このまま死んでしまうのかな？ でも僕は負けなかったよ
森の中でひっそり生きるか死ぬか 負けたことにはならないでしょう？

きいろ

きいろ きいろ

たんぽぽ ばら パンジー

きれいだな きれいだな

ああ

きいろのワンピース

きいろのTシャツ

いつかほしいな

かわいいやつがいいな

かわいいやつが

きいろ きいろ

しんごうき お月さま

きれいだな

ああ

嗚呼

よこにあるティッシュのはこが

きいろ

だからいつでもハッピー

きいろ きいろ

みるだけでたのしいな

すてきだな

ああ

きいろい にんげんに

生まれてよかったな しあわせだな

ああ

嗚呼

「あいしてる」って

よくおとなが

ドラマのなかで いってるけど

それはきいろいものかな？

だったらいいな

だったらいいな

そうだったらいいな

ああ

嗚呼

コーンフリーク

ごめんね

ごめんね

私コーンフレークしか知らないよ
だからフリークって言われても
何かな？

たとえば朝食を
コーンフリークしか食べないとか
そういうものかなあ
君をとらえる網膜とか
そういうものかな

耳の奥で
黒電話が鳴ってる
フリーク
君はフリークだとはじめて思った
やっぱり中毒って言われないと
食べた気がしないけどね
黒電話がどこにあるか
一緒に探そうよ

でも君なら中毒じゃなく
マニアでもなく
フリークだと思うんだ

ごめんね
ごめんね
私はさっき言ったけど
やっぱり君のフリークだと思うし
黒電話が鳴ってるよ
もう行かなきゃ

きっと君のフリークだよ
そして君も
悲しいフリークなんだね

渦を巻いて

もう何百年も

鳴り続ける黒電話の正体は君にフリーク

コーンフリーク

クレイグ・オーウェンズ

彼は声で嘘をついてる
お迎えの虫が外に止まってる
こんな美しい声の人 世界にいていいはずない

咳をしてもいけないところにいる
本音をこぼしてもいけないところにいる
生きることって車裂きの刑みたいだね クレイグ

悪魔の羽でもいい もう何でもいい
どこへ行く羽でもいいから私に羽をください
どこかへ連れていかれる前に
あなたに逢ってみたいな
ただの夢でしょ
そうなんだ

病気の話でもしよう
まず席に座ろう
アイスティーでも飲みたいな
きっとあなたもこの世界にいられなくなったから
こんな美しい声で歌うんだろうね

この世界は壁も鉄格子も監視カメラもない閉鎖病棟...

悪魔の羽で きっと恐ろしい深みへ 行くんだろう 平気だよ
それがあなたの見てきた世界ならば見てみたい
さぞかし陰惨で絶望的で苦しみに溢れた世界ならば

だって声で嘘をつくんだよ？
世界にいていいはずない
美しい声で悪魔は歌うんだよ？

彼を悪魔と言うのならば
私も悪魔がいい
人間よりずっといい
一緒に行こう 人間のいない世界へ

彼のをを聴いているときだけ 私は息のできないこの世界から出ていく

鍵をかけて

気持ちを閉じ込めておこう クレイグ

閉鎖病棟

患者の1割は空気 9割は大気汚染
ならその1割の空気を吸って生きていこう
看護師の1割は優しさで 9割は偽善
ならその1割の優しさを握り 離さないでついて行こう

保護という名の壁にガシャンとかけられる重い鍵が
どれだけ私の心を粉々に壊したか
でも汚い段ボールにブルーシート その上に置かれた食事は
誰にも伝えられないのが悔しい程優しかったか

みんな嫌いだ嫌いだ嫌いだ消えてしまえばいい
ひとりでは生きられないこと分かっているのに
そこで喋るな喋るな喋るな口にガムテープ貼って拘束したい
その人も寂しいこと分かっているのに

患者の9割は大気汚染
息が詰まるような 喘息になるような大気汚染
吐きそうな大気汚染

だけどあと1割は空気
こんな私に「こんにちは」って言ってくれた
息ができるような気がした

看護師の9割は偽善
暴れてない患者をとっ捕まえて
無理矢理正義の注射を打つような

だけどあと1割は優しさ
だって看護師は少なくとも
食事を部屋まで持ってきてくれるから
その1割について行きたい
賭けてみたい

鳩を飛ばそう

光が笑ってる
ベッドのすぐ下で
光はとても
穏やかな目で僕を見る
日本語は知らないけど
いつも暗い顔の僕を
笑わせようとしてるんだな

光が部屋に射し込む
光ととりあえず握手する
誰ともうまくやれない僕を
仲間に入れようとしてるんだな

光が林の中で
かくれんぼしてる時
僕の中の想いが弾けて
鳩になって飛んでいった

もう自然には戻れないし
林の中で動物みたいに暮らすこともできない
こんな僕と
光は友達になりたいって言ったんだ
物好きだなあ

約束なんて
なくても大丈夫
明日も明後日も雨の日も
必ず
光は僕を見てるから
嘘つかないから
記憶にあるより前から...

光と鳩が遊んでる

僕はあの鳩なんだろう
鳩がきらきらって歌うと
僕の悲しみもきらきらって歌う

自然にはなれないけど
自然みたいになりたい
光が手を振る
また明日って
約束なんて
なくても大丈夫

閉鎖病棟から鳩を飛ばそう

<http://p.booklog.jp/book/107652>

著者：雨野 小夜美

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/tinycolor/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/107652>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/107652>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ